【第９６話】合成愛液入りハイボール

　仁科研究室の懇親会は既に飲み会と化していた。紳士然としていたゼミ生たちのうちの数名はすっかり酔っ払ってしまい、ヒューマノイドのエロさを語っている者がいるかと思えば、アンドロイド開発を進めるためにＡＩの研究にも力を入れるべきだと力説する者もいたりと、リビングは騒然としている。

　そんな中、里香子は明日美を使い、未成年だったり下戸だったりといった理由で酒の飲めないゼミ生にソフトドリンクの提供を続けていた。

　今、場を盛り上げている話題は焼酎に合成愛液を混ぜてチューハイを作るのはどうだろうか、というものだった。ドリンクサーバーに改造された明日美に触発されたためだろうか、ゼミ生達は活発に意見を交わしている。

　やがて議論に加わっていた女性のゼミ生が

実際に試してみないかと提案すると、男性たちはぜひお願いします！　と声を揃えた。女性が男性陣の勢いに苦笑しつつもスカートの中に指を滑らせ股間を弄り始める。提案した女性はヒューマノイドだったのだろう。自慰動作を開始した女性の下腹部から機械音が聞こえてくる。

　その女性に寄り添うように立っていたもう一人の女性が、真っ赤な顔をして慌てたように周囲を見回す。どうやらもう片方の女性もヒューマノイドらしい。先に自慰動作を始めた女性に促され、最初は拒絶したものの、逆らえなかったらしく、同じように自慰動作を始める。どうやら提案した女性がもう片方の女性のマスターのようだ。

　二人のヒューマノイドはそれぞれに男性のマスターがいるのかと思っていたのだが、違ったらしい。並んで自慰をするヒューマノイドの二人からはかなり大きな駆動音が響いている。音からすると同タイプの電動式女性器を用いているようだ。幼い頃から慣れ親しん

だ人工女性器の駆動音を聞いて、里香子は自慰動作を行う二人に羨望の眼差しを向けた。

「みんな。準備できたわよ」

　先に自慰動作をし始めた女性の方が声をかけ、意味ありげに微笑みながらショーツを下ろしてスカートをたくし上げて開脚する。里香子の視線も周囲の他のゼミ生と同じように女性の股間に釘付けになった。

「俺からいいかな？」

　年長の院生らしきゼミ生が軽く手をあげる。どうぞ、と微笑んだ女性がクリトリスを操作すると人工陰唇が左右に開く。完全に露わになった女性の人工女性器は、外観から明らかに作り物と判るデフォルメされたタイプのものだった。手を上げた院生がハイボールの入ったグラスを女性の股間に寄せ、人工膣口に近づける。それを確認してから女性がクリトリスを操作する。

一気に人工膣を締めつけたためだろう。一際大きいモーター音と共に、女性の作り物の膣から合成愛液が勢いよく飛び出す。グラスに合成愛液を受けとめた院生が軽くグラスの中身を混ぜてから、静かに飲む。その後、じっくりと中身を堪能するためか目を閉じていた院生が頷くと、その瞬間、周囲を取り巻いていたゼミ生たちがどよめいた。

それならアルコールではない炭酸飲料も作れるのではないだろうか、というのは未成年のゼミ生たちから上がった声だ。ものは試し、と最初にノンアルコールの炭酸飲料の案を出したゼミ生が明日美の方を向く。里香子は頷いて明日美の内部に残った飲料の残量をチェックした。幸い、一杯分のソーダ水が残っている。

明日美の股間からソーダ水が提供される。紙コップを手にした若いゼミ生がありがとうございます、と頭を下げてから、先ほどの女性達の方へと向かう。そんなゼミ生を見送り、ざわめきに包まれるリビングを突っ切って里

香子は明日美を連れてバスルームへと向かった。

　バスルーム手前の脱衣場で里香子は明日美の着ている服を脱がせた。明日美が着ているのは一見、メイド服に見えるが特注品だと聞いている。確かに手触りといい、デザインといい、縫い方といい、とても丁寧な仕上がりになっている一品だ。濡れても問題がないように、という理由で布は綿やポリエステルが使われているが、水分が付着しない部分にはさりげなくシルクなどの高級素材が使われている。

　陵から聞いた話では、エンジェル・オア・リリスという店で作らせたのだという。店名だけは里香子も耳にしたことがあったのだが、これまで行ったことがない。今度行ってみよう、などと思いながら里香子は自分も服を脱いで、明日美と一緒にバスルームに入った。

　まずは機体内部の洗浄だ。洗浄用の部品を

ホースに接続している時、それまで黙していた明日美が口を開いた。

「里香子さま、今日はほんとにありがとうございましたっ！」

　急に声を掛けられたことに驚きつつも、里香子は明日美がとても感謝しているのだということを声音から感じて微笑んだ。明日美は陵の企画通りの働きをした。そのことは里香子もよく知っている。

「皆様のおかげで首がつながりました！　ええ、もう、ほんとにパーツの査定のためとか言って首外されて身体調べられた時にはどうなることかと！」

　感激のこもった明日美の言葉に里香子は頷いた。

「本当に良かったわ。綾さまや結衣さま、そして洋子さまのおかげね」

後ろ盾や財産を持たないヒューマノイドの人権はあってないようなものだ。道具として作り出された場合、マスターの気分次第で廃棄処分されてしまう事も日常茶飯事だ。ヒューマノイド化された全ての女性が日の当たる場所に出られる訳ではない。そのことを里香子はよく知っていた。

「自動的に歩いて、転ぶこともないですし！
本当に素晴らしいです！」

明日美が感激の言葉を述べている間も里香子は作業の手を止めなかった。洗浄用のホースを明日美の口内に入れて機体内のタンクを洗浄する。その間も明日美の声が問題なく聞こえているのは、生身と違ってヒューマノイドの音声がスピーカーから出されているからだ。

改造される前の明日美はメイドの仕事をよく失敗していたという。メイド長の梓がこのままでは明日美は解体処分になるかも知れない、と誰かに話しているのを里香子は物陰で

聞いてしまった。明日美は確かにミスもするが、里香子の部屋を掃除したり洗濯物を片付けてくれたりと、かいがいしく世話を焼いてくれていたのだ。

　そんな明日美が解体処分になるのは辛いと思っていた矢先だった。陵が明日美を改造するという話を聞いて里香子は嬉しかった。そして今は陵の思惑通りに明日美はドリンクサーバーとしての役割を全うしている。

　それに明日美が持っていたという排泄行為に関わる特殊な性癖も十分に満たされているようだ。世間的に見れば明日美は色物的な存在かも知れないが、だからこそピンポイントに嵌れば確かな需要がある可能性が高い。

　とりあえずは生徒会の備品の什器として運用しつつ、販売先やレンタル先を模索するというのが一番良いプランだろうか。そんなことを考えつつ、里香子は手際よく明日美の機体内のタンクを洗浄し、コントローラーで操作して明日美の股間に設えられた洗浄用排水

口を開口した。

　明日美の洗浄用排水口は膣の脇に取り付けられており、普段は閉じている。エスプレッソなどを淹れる際に出る廃棄物も洗浄剤で流してしまう仕様のため、明日美が出す排水は薄い網が張られた特殊な受け皿が必要になる。里香子は明日美の股間に専用の受け皿を置いてからコントローラーで排水させた。すると開いた排水口から茶色い排水が溢れ出る。

「ふぁぁあああん！」

　明日美の声がバスルームに響く。排泄行為に近い動作で快感を得るという明日美の特性も上手く機能しているようだ。排水に混ざった粉末状のコーヒー豆をごみ箱に移し、再度、里香子は明日美の洗浄をした。何度か繰り返して排水が透明になり、完全にごみがなくなったところで、今度は機体外部を洗浄する。股間周りはどうしてもドリンクが散ってしまうため、今日も実演中に途中で拭いてはいた

のだが、やはり完全には汚れは落ちていない。里香子は念入りに明日美の股間周りを洗い流しながら、今後のことに思いを馳せた。

　洋子は明日美の代わりにメイド奨学生として補欠合格したヒューマノイドを自分の手元に置くつもりらしい。だとしたら明日美の動作管理はそのメイドヒューマノイドに任せた方がいいのではないだろうか。里香子が生徒会入りすれば生徒会業務もこなさなければならないし、何よりドリンクサーバーなどの什器の手入れや取り扱いはメイドの仕事だ。

　使用人であるメイドは里香子が管理し、什器である明日美はメイドが管理するという体制にすれば効率的ではないだろうか。そう考えた里香子は一人、頷いた。

　綾さまにご相談すべきね。

　心の中で呟きつつ、里香子は手早く明日美の洗浄を終えた。バスルームを出てまずは自分の服を着てから、明日美の機体を入念に拭

いた後、ダンボール箱の中に体育座りの格好で納めて荷台に乗せる。

　これで問題なく運ぶことが出来る。明日美入りのダンボール箱を乗せた荷台を押してバスルームを出たところで、里香子はばったり陵と結衣、それに保美の三人と会った。

「あっ！　ごめん、木之下に任せっぱなしにして」

　慌てた様子で陵が言う。里香子は微笑みを浮かべて会釈した。

「綾さま、滞りなく全てのドリンクをふるまいました」
「え？　全部？　じゃあ、もしかしてもう洗い終わったとか？」

　里香子に並んだ陵が歩きだす。里香子もつられるように陵と共に歩き始めた。

「はい。洗浄も完了しています。もう撤収可

能です」

　頷いた里香子はそこでふと、これまで陵から感じていた拒絶の壁を思わせるプレッシャーがなくなっていることに気がついた。屈託なく笑う陵を見てから、さりげなく結衣を見やる。里香子は今まで陵と結衣から無言の圧力に近い何かを感じ、自分から二人には極力接触しないように心がけていた。が、今はその壁のようなものがないのだ。

　里香子は三人と一緒に今日の明日美の成果を喋りつつ、玄関に向かった。幸い、保美にメイドとして仕えているつばさは事情があるのか姿を見せない。そのことに里香子は内心ほっとしていた。

「じゃ、帰ってからすぐに色々やらないとかな。とりあえず、木之下には事情も説明したいし」

　そんな風に言いつつ陵が保美を振り返り、笑みを浮かべて手を振る。

「それでは。綾さま、結衣さん、里香子さん。頑張ってくださいね」

　保美に見送られて三人は家を出た。雨は小降りになっていたが、行きと同じように左右から陵と結衣に傘を差し掛けられる格好で里香子は荷台を押した。雨を避けてくれる傘を何気なく見上げてから、里香子は何となく陵に目をやった。

「ん？　どうした？　この格好だと歩き辛いかな」

　行きはきっちりと三つ編みにされていた陵の髪は今は解かれ、ヘッドドレスもない。もしかしたら里香子が見ていないところで何かあったのだろうか。想像しかけて里香子は慌てて首を振った。うっかり二人が絡み合う想像をしてしまうと、勘が鋭いためか陵にすぐに気付かれて嫌悪いっぱいの表情をされるのだ。

　だが今の陵からはそんな雰囲気は感じ取れない。困ったような笑みを浮かべた陵が里香子の額を指で軽くつつく。

「往来でヤバい想像するんじゃないって言っただろ？」

　今の木之下は危ない状態だからすぐに昂奮して動作出来なくなるから。近づいた陵に耳打ちされた里香子は真っ赤になってしまった。

「綾。意地悪言わないの。ヒューマノイドはマスターの命令に絶対服従だけど、えっちなことを想像するのとおなにーは止められないんだから」

　今度は里香子の左側にいた結衣が唇を尖らせて言う。二人に間近に挟まれる格好になった里香子は行きとは随分と違う雰囲気に戸惑った。

「そうだけど、木之下は機体換装しないまま

で妄想とかするとヤバいんだってば。今でもギリギリ限界のはずだし」

　身を乗り出すようにして陵が言う。陵の体温を間近に感じられるほどに近づかれた里香子は思わず身を竦めた。機体表面を覆う人工皮膚に植え込まれたセンサーが反応し、絶え間ない快感信号を送ってくる。挿入しっぱなしになっている結衣のローターを意識せずにいられなくなり、里香子は真っ赤になりながら二人を伺った。

　戸惑う里香子をどう思ったのか、左側を歩いていた結衣が話しかけてくる。

「綾はね、里香子さんの事を苦手に思ってたんじゃなくて、ヒューマノイドなのに過剰に人っぽい機体が苦手だったの。そして、あたしもそれに引きずられてたみたい。ごめんなさい」

　軽く頭を下げた結衣を見て里香子は慌てて何度か首を振った。すると今度は右から陵が

ごめん、と詫びてくる。

「そんな、わたくし自身もせっかく大金を投じて作っていただいたこの身体……いえ、機体を好きになれず、あ、えっ、すみませんっ！」

　里香子は涙が零れてきたことに驚きを感じつつも慌てて謝罪した。だが涙が溢れるように出てきて流れるばかりで止められない。

「まあまあ。無理矢理好きになろうとしても仕方ないじゃん？　本当は木之下だってこの機体、かなりきつかったんだろ？」

　里香子の右から傘を差し掛けた陵が柔らかな笑みを浮かべる。里香子ははっと息を飲んで陵を見た。そう、里香子は自分の機体を好きになれないどころか、とても嫌だと感じていたのだ。そのことから目を背け、母親が高い金をかけて作ってくれたものだから、好きにならなければならないと思い込もうとしていた。しかし、その事が歪みをもたらしてい

たのだと、今、初めて気がついた。

　よしよし、と言いながら陵が里香子の頭を撫でる。片手で涙を拭い、もう片方の手で荷台を押していた里香子は歩きながら泣きじゃくった。

～立ち読み版はここまでです～